

分科会活動報告

環境過敏症分科会2022年度活動報告

北條 祥子¹⁾²⁾ 水越 厚史³⁾ 黒岩 義之⁴⁾⁵⁾

1) 東北大学大学院歯学研究科

2) 尚絅学院大学

3) 近畿大学医学部環境医学・行動科学教室

4) 帝京大学医学部附属溝口病院脳神経内科・脳卒中センター

5) 財務省

Report of the Environmental Sensitivity Subspecialty Meeting (2022)

Sachiko Hojo¹⁾²⁾, Atsushi Mizukoshi³⁾, Yoshiyuki Kuroiwa⁴⁾⁵⁾

1) Tohoku University Graduate School of Dentistry

2) Shokei Gakuin University

3) Department of Environmental Medicine and Behavioral Science, Kindai University Faculty of Medicine

4) Department of Neurology and Stroke Center, Teikyo University School of Medicine, Mizonokuchi Hospital

5) Ministry of Finance

【分科会設立の背景と目的】

近年、先進国を中心に、環境過敏症（環境不耐症）と呼ばれる健康障害を訴える人が急増しており、早急な病態解明や予防対策が求められている。環境過敏症とは通常では問題にならないような身の回りの微量な化学物質（室内空気汚染物質・受動喫煙・医薬品・殺虫剤・芳香剤・柔軟剤等）、生物的要因（カビ、ダニ、花粉、ウイルス等）、物理的要因（音、光、地震、低気圧、パソコン・スマホ・MRI装置等からの電磁場など）により、多器官に多彩な症状が現れる健康障害の総称である。その代表例はシックハウス症候群、化学物質過敏症、電磁過敏症であり、アレルギー疾患と密接に関係していることはよく知られている。しかし、本症は種々の要因の複合的な影響で

発症すると推定され、その病態は科学的に未解明な部分が多い。日本臨床環境医学会環境過敏症分科会（以下、本分科会）の目的は国内外の研究者と共同研究や情報交換を行いながら、環境過敏症の科学的に未解明な病態を解明し、診断基準の確立、治療法・予防法の確立をめざすことにある。（本分科会は室内環境学会の環境過敏症分科会と協力体制を組んでいるが、両分科会はそれぞれの母体学会の特色を生かしながら活動している。現在、本分科会では“環境過敏症の病態解明、診断基準と有効な治療法の開発”を主として検討し、室内環境学会環境過敏症分科会では、“室内環境改善などの発症予防法の確立や認知度を高めるための活動”を主として検討している。）

【2022年度の活動】

1. メーリングリストを介した日常的に共同研究や最新知見の情報交換・情報共有

2. 第30回日本臨床環境医学会学術集会時の活動

1) 本分科会のメンバーによる特別講演2演題(相澤好治先生、吉野 博先生)および33の一般演題の発表

2) 環境過敏症分科会交流会の開催

本分科会と“室内環境学会環境過敏症分科会”との共催で、第1部「石川 哲先生の思い出と今後の会の発展を語る会」と第2部「台湾建築医学学会との交流会」を開催した(写真1)。



写真1

日時：2022年6月25日(土) 18:00-20:00

場所：工学院大学新宿キャンパス

企画・司会：北條祥子、黒岩義之、水越厚史、柳沢幸雄

参加者：42名(現地参加26名、オンライン参加16名(日本11名、台湾5名))

<内容>第1部では、吉野 博先生の司会で、石川 哲先生の御冥福を祈り1分間、黙祷した。その後、石川 哲先生と親交が深かった宮田幹夫先生、吉野 博先生、柳沢幸雄先生、小倉英郎先生、上田 厚先生、黒岩義之先生が、石川 哲先生の思い出を話された。宮田幹夫先生から「石川 哲先生は暗いことがお嫌いだったので、偲ぶ会でなく、本分科会の今後の発展を明るく語る会にしましょう」とのご提案があった。そこで、記念写真を撮影後、参加者全員が、一言ずつ、「石川 哲先生との思い出」、および、「石川 哲先生の御遺

志を引き継ぎ、環境過敏症の病態解明や発症予防法を確立するために、今後、どのように研究活動をしたらよいか”について、率直に語り合う、明るく楽しい会となった。

第2部では、柳沢幸雄先生が座長となり英語で会を進行し、オンライン参加の台湾建築医学会5名の研究者と日本の参加者(37名)が交流した(写真2)。



写真2

黄 嘯谷台湾建築医学学会榮譽理事長、張 智元台湾建築医学学会理事長および黄 琳琳台湾建築医学学会事務局長が「台湾建築医学学会は台湾でも比較的新しい分野の学会で、そのメンバーは、土木、建築、環境工学、IT研究者、医師など幅広い研究者で構成されている。台湾建築医学学会ではアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の医学部教授でもある黄 嘯谷先生が医学と公衆衛生の分野を指導して下さっている。医学以外の分野(建築、環境科学、情報、ITとかAIなど)は私たちが中心に指導している。将来的には、工学の立場から患者の治療にも関与したいと考えている。日本からの研究者も台湾建築医学学会学術集会に参加して、研究発表をしていただければうれしい。」と話された。その後、会場の日本からの参加者との間で、「今後の日本と台湾の研究協力の進め方について」、率直で活発な質疑応答が行われた。

3. 2022年室内環境学会学術大会時の活動

1) 環境過敏症分科会セミナーの開催

本分科会と“室内環境学会環境過敏症分科会”との共催で、「セミナー：With コロナ時代に環境過敏症にならないために出来ることは？—マルチ異分野の研究者からの提言」を開催した(写真3)。

日時：2022年12月1日 9:45-11:15

場所：江戸川区総合文化センター小会議室



写真3

企画・司会：北條祥子、黒岩義之、柳沢幸雄
 参加者：35名（現地25名、オンライン10名）
 <内容>来賓として台湾の黄 嘯谷先生（台湾建築医学学会榮譽理事長）が挨拶した後に、以下の11名が、順次、話題提供した。その後、会場の参加者と総合討論を行い、最後に集合写真を撮影した。これら11名は以下の一般演題（ポスター・口頭）発表も行った。①北條祥子「環境過敏症患者の現状と今後の展望（疫学研究者として）」、②黒岩義之「環境と医学の接点（脳神経内科学研究者として）」、③山中隆夫（睡眠科学研究者として）」、④中里直美「薬剤師の調査から学んだ脳脊髄液減少症の環境過敏反応（薬剤師として）」、⑤鈴木高弘「脳脊髄液減少症に伴う電磁過敏反応に関する症例報告20例（薬学研究者として）」、⑥水越厚史「環境過敏症の発症予防とバリアフリー（疫学研究者として）」、⑦浦野真弥「香料製品の適切な利用を考える（環境工学研究者として）」、⑧上田厚（NPO 法人アジアヘルスプロモーションネットワークセンター）「環境過敏症患者のエコロジカルな生活スタイルに学ぶ（社会医学研究者として）」、⑨黄 琳琳「可視化による地下居室における気流環境設計方法（建築学研究者として）」、⑩許 媛婷「台湾の住宅における室内環境と空気質の学際的な調査（公衆衛生学研究者として）」、⑪柳沢幸雄「予防原則に基づく環境過敏症対策（環境学研究者として）」

2) 台湾研究者との交流会（第1部、第2部、第3部）の開催（写真4）



写真4

共催：室内環境学会環境過敏症分科会
 日時：2022年12月1日（第1部11：15-12：15、第2部13：00-14：00、第3部17：45-19：30）
 場所：江戸川区総合文化センター和室
 企画・司会：北條祥子、黄 琳琳
 参加者：15名（台湾5名、日本10名）
 <内容>第1部では、セミナー終了後に残れるメンバーが隣の和室に移動してセミナーの審議の続きを行った。その後、ポスター発表者はポスター会場に移動して、各自、発表ポスターの前で質疑応答に応じた。第2部では、ポスター発表後に和室に戻り、皆で昼の会食後に意見交換を行った。第3部では大会の国際シンポジウム終了後に、柳 宇先生や東 賢一先生も参加し、今後の国際協力について意見交換を行った。

【分科会メンバー（アイウエオ）◎代表、○副代表、*幹事】

<医学・医療分野> 日本：相澤好治、青木真一、東 賢一、石竹達也、五十嵐公英、井上博之、上田 厚、内山巖雄、大澤 稔、奥村二郎、小倉英郎、角田和彦、○黒岩義之、小橋 元、近藤哲哉、坂部 貢、篠永正道、*鈴木高弘、鈴木珠水、平久美子、高塚俊治、高野裕久、田村澄江、出村 守、東門田誠一、土器屋美貴子、*中里直美、中吉隆之、西影京子、*乳井美和子、春山康夫、平井利明、◎北條祥子、松井孝子、○水越厚史、宮田幹夫、山口みほ、横田俊平、吉田貴彦、山崎明夫、山中隆夫、盧 溪、渡井健太郎 台湾：陳

力振、黄 嘯谷、許 媛婷、蘇 庭耀

<建築・生物学・化学・物理学・工学・社会科学

分野> 日本：池田耕一、岩崎由美子、上田昌文、浦野真弥、大塚健司、加藤やすこ、川瀬晃弘、木村-黒田純子、近藤加代子、菅原正則、関根嘉香、寺田良一、*徳村雅弘、永吉雅人、二科妃里、長谷川麻子、羽根邦夫、林 基哉、萬羽郁子、星野陽子、柳沢幸雄、*柳田徹郎、吉野 博 台湾：張 智元、*黄 琳琳

詳細は学会のホームページ (http://jsce-ac.umin.jp/200725/jsce05-3bunka_02.html) を参照して下さい。